

**msn**

ニュース

Hotmailユーザーに便利な追加容量サービス

トップ | トピックス | ジャーナル | 速報 | 社会 | スポーツ | ショウビズ | 政治 | 経済 | サイエンス | 国際 | 業界レポート (PR)

経験OKの仕事、満載！  
務系から企画系まで！

**MSN ジャーナル**

ダイレクトライン  
自動車保険料  
最速10%OFF  
マネー  
おぼえく球団 知東

ニュース検索

すべてのカテゴリ

業界レポート (PR)  
(提供 インテリジェンス)



**最新ニュース**

- イラン核関連施設以外で高濃縮ウラン、IAEAが検出
- 言語教育で初の統一方針＝背景に英語の普及＝スイス
- アーセナルが9日間に4試合＝プレミアリーグ当局が過密スケジュールに謝罪
- 殊勲者・藤田、浦和戦で2ゴール

**経済情報**

日経平均 11,815.95 ↑

NYダウ 10,470.59 ↑

米ドル 104.53

東証1部 896 ↑

騰落数 555 ↓

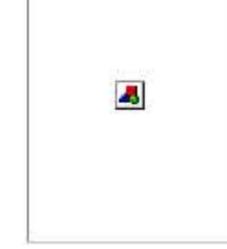
東証1部

売買額ランキング ソフトバンク

マーケットサマリーへ  
マネー最新情報へ

**ニュースセレクト**

**結婚は幸せへの切符なのか ――アメリカ女性の「遠吠え」**



「嫁が産まず、この齡に。どんなに美人で仕事ができても、30代以上・未婚・子ナシは『女の負け犬』なのです」(『負け犬の遠吠え』酒井順子 講談社)

このキャッチコピーを聞いた時、さすがにぎょっとした。私が生活するアメリカにも酒井さんのおっしゃる"負け犬"はうじゃうじゃいるが、果たして遠吠えは聞こえるだろうか? (吉田朱見:3月30日)

●なぜ結婚しないか

アメリカでは、社会制度の変化や男女の社会における役割の変化に伴い、過去40年の間に女性の結婚観も実質的に変化。晩婚化が進んできた。国税調査の統計を見ると、1970年の全米の結婚率は全人口の66.8%。離婚率は2.2%に留まっているのに比べ、2002年は結婚率が57.4%に減少、離婚率は4倍近くの8.1%に増えている。初婚平均年齢も2002年は男性26.9歳、女性25.3歳で、1970年の同23.2歳、20.8歳に比べるとかなり高くなっている。晩婚率が高くなれば、必然的に両親と同居する時間も長くなるわけで、25歳～34歳の子供が両親と同居している数字も1970年の6.6%から2002年の8.3%に上がっている。

なぜ米国女性は結婚しなくなったのか?

まず経済的要因が大きいだろう。女性が社会で働き、経済的な独立が可能となったことで、結婚するか否かという選択権を楽に持つことができるようになった。実際に、専門職を持つ女性に離婚率が高く、反対に出生率は低いという統計がある。また、男性の平均経済力は70年以来下がりっぱなし。さらに離婚しても妻への扶養手当金などはなくなりつつある。昔のように"結婚"で一生の安定を買うことができなくなったのである。

フェミニズムが提唱された影響もあると思われる。たとえ自分自身をフェミニストだと思っていない女性達でも、「妻・母親という役割以外にも、女性にはもっと社会で貢献できる場があり、それを生かすべき」という声には、皆少なからず影響を受けているようにみえる。

さらに教育に対する考え方もある。高度な教育を望めば、それだけ婚期は遅れる。アメリカでは60年半ばには5人に1人だった大学進学希望者は、80年には5人に2人となり、以来急速に増加し、より長い修学年数を要する弁護士や医者を目指す女性は60年代に比べ、それぞれ10倍以上、5倍以上の数に膨らんでいる。学生結婚といったケースなどを除けば、婚期が遅れて当然である。また、両親が専門職を持っていたり、高い教育を受けていると、結婚に関して子供にプレッシャーをかけない傾向にあるため、その子供達を結婚に急がせる外的要因は少ないといつてよい。受けている教育が高度なほど、結婚時期が遅く、離婚率が高いという数字も出ている(ただし高校中退組を除く)。

反対に、自分の家庭が不和であったり、両親が離婚していたりすると、結婚生活そのものに夢を描くことが難しいケースもあるだろう。実際結婚総数の半分が離婚に終わり、10人中4人の子供が結婚していない女性から生まれているというアメリカでは、そういう感情を持つ人も多にちがいない。

テキサス大学のWomen's Study(女性学研究)によれば、アメリカの女性達が(家族や社会などからの)「抑圧」によってではなく「幸福」を求めて結婚をするようになったのは、60年代のセックス革命からであるという。

今から10年程前に行われたアンケートでは、「36%の独身女性が結婚しないで子供を作ることにも考慮にいれている」という統計が出た。そして現在、それは現実化してきている。不幸な結婚をするなら、子供くらい自分で育てるわ、という女性が確実に増えてきているのである。種を残すためだけに必ずしも結婚しなくてもいい、というわけだ。

●結婚観の見直し

日本の負け犬論争では、『女の勝ち』の条件として結婚がある。しかし、テキサス大学社会学者のグレン教授は、独身女性のほうが、10年以上結婚している女性よりも幸福を持っているとの研究結果を発表している。

また、ジェシー・バーナード氏は著書の中で、「既婚男性のほうが、既婚女性よりも幸福感が強い」と語った。これだけ離婚率が高くなっているのだから、離婚しないでいる夫婦というのは幸福なのだろうと思いたいが、結婚生活に幸福を感じないと答えた人は、1973年に比べて上昇し続けている。

なぜ勝ち組であるはずの既婚女性たちがこんなにも不幸なのか?

スキッドモア大学などで講師を勤め、詩人で且つ女性に関する考察著も多いロリー・アンダーソン氏は、離婚が増加したのは社会が2つのことを男女に強制しているためだと答えている。

1つめは「(社会が)男性に女性の何を魅力と感じるべきかを強制」し、2つめは「(社会が)女性に男性に魅力的に思われるにはどうすればよいかを強制」していること。現在でも、こうした「〇〇であるべき」的な男女像を結婚で求めるがために、結婚制度がだめになっていくという。離婚の75%は女性側からの申し出による数字がある。社会が理想の夫婦像を押し付けることによって、既婚者、特に女性にはそれがプレッシャーとなる部分があるのかもしれない。

「結婚とは施設のようなもの。例えば、軍隊や教会、学校…。女性の進出を心からは望んでいない」と、ロリー・アンダーソン氏。かなりの社会悪者説で、ここまで言い切られるとちょっと怖い、共感しないわけではない。新しい女性の時代に結婚観が古いままでは、皆逃げ出すのは無理もなからう。女性が結婚に今何を求めているかは各自が違うだろうが、今の社会が女性に求めているものではないことだけは確かである。男性が悪いというのではなく、男女ともに新しい結婚観を育てていく必要がありそうだ。

●アメリカ人の遠吠え

アメリカ人は実に多様だ。これだけ離婚率が高いせいで、まわりにも30歳を越えた独身者や離婚経験者がたくさんいるが、自分の意志で2人の子連れ離婚をした後、収入も資産も十分にあるのに「私は、ミセス〇〇でいるのが好きなの」とさっさとまた結婚してしまった42歳の友人もいれば、「しばらく男はいいわ」と勉強しにヨーロッパに旅立った36歳の女性もいる。「今度こそはソウルメートを見つけない」という人もいれば、「仕事に生きる」という人もいる。ロリー・アンダーソン氏の教え子である、6年前に離婚した38歳の女性は、「結婚すると女性の中で何かが変わる。それが明確に何かということは自分でも分からないのだけれど、2度とその変化を自分の中に引き入れたくないことは確か。デートはするけれど、子供は自分1人で育てていくつもり」と言う。また他の30代半ばの女性は、「元旦那がひどい人だったというわけではないけれど、もう結婚はしたくない。自分が自分であるために、自由が必要」。他にも「結婚生活をするために、女性があきらめなければならないものが多すぎる。子供がほしければ、別に結婚していなくて作れる」、「ボーイフレンドと一緒に住むことにしたけれど、結婚はしない。仕事も辞めないし、家事や料理もするつもり。でも、ボーイフレンドが妻であることを私に求め出したら、出ていくわ」などなど…。

アメリカの「負け犬」達は元氣だ。彼等からは遠吠えらしきものは聞かれない。人間だから時に落ち込むこともあるし、悩むこともあるが、自分の生き方についてけっこうあっさりとして割り切っている。「このままでいいんだろうか・・・」なんて考えが浮かんだら、うじうじせずすくさま結婚してしまうだろうという勢いもある。アメリカは貧困率が高いので、子連れ離婚で「さあ、明日の食事にも困った」という例もたくさんあるが、それはそれで怒りをあらわにし、政府に直談判する強さもある。

20年以上も前、日本では「女性の社会への進出を」「女性をうまく使った企業は成功する」などとうたわれ、「仕事ができるかっこいい女」を目指した女性達は一生懸命勉強し、仕事し、社会に進出して来た。雇用機会均等法も施行された。他の先進国に比べて、女性の社会的地位はいまひとつ伸び悩んでいるとはいえ、日本の女性達はがんばってきたはずである。それを少子化が進んだからといって、今さら手のひらを返したように(徐々にであったのかもしれないが)、「子育て支援や社会保障の充実で、もっと女性が子供を生むように」などと政府からはっぱをかけられても、こちらは何やら肩透かしをくらわされたような気がして仕方がない。

とはいえ、女性の幸せ、個人の幸せは、政府が作ってくれるものではない。政府は国民が豊かな生活づくりができる環境を整えてくれる(整えようと努力してくれる)だけである。与えられた環境の中で、幸福を勝ち取るか、ルーザー(負け犬を英訳するとこうなるのだろうと思うが)になるかは自分次第。大企業ベア・スターンズの会長、エース(愛称)・グリーンバーグ氏は、そのビジネス手腕の他、優秀なブリッジプレイヤーとしても知られるが、彼は「人生もブリッジと同じ。配られたカードの中で、ベストなプレーをすること」と語っている。

「あの時結婚していれば」「私にはかわいい女の素質がない」と過去や素質を悩むよりも、また「このままでいいのだろうか」などと実用的でない落ち込みスパイラルに迷い込むよりも、これからの自分を目をそらすに見つめていくことこそが大切なのではないか。自分の意志で選びとった人生を歩む者が不幸であるはずがない。ましてや、幸せかそうでないかは、自分で決めること。他人に決めてもらうことではない。「結婚していない女性は不幸」という概念を吹き飛ばすだけのパワーが日本の「負け犬」達にもきっとあるはずだ。